

アメリカ保守主義運動に関する一考察(1)
—保守主義運動の敗者の視点から—

漆 畑 智 靖

An Analysis of the American Conservative Movement (1):
From the Perspective of a Group Ousted from the Movement

Tomoyasu Urushibata

Abstract

This article analyses the conservative movement in the United States from the standpoint of the paleoconservatives, pushed out in the eighties by the movement's leaders, who at that point already included neoconservatives. They proudly labeled themselves "paleo" in order to show both their commitment to the Old Right tradition, pre-*National Review*, as well as their defiance of the "neo" conservatives, late-comers to the movement. They aligned themselves with paleolibertarians, who had been themselves marginalized from the mainstream libertarian movement; shared beliefs included foreign policy non-interventionism, anti-statism, and respect for Western, Judeo-Christian traditions. Some paleoconservative scholars have re-examined more orthodox interpretations of the conservative movement's history in order to understand what went wrong and discover other traditions which might have been dismissed as heresies. This article is a first step in investigating the possibilities and limits of these efforts, in search of new directions in studying the conservative movement in the United States.

Key Words: アメリカ保守主義 (American Conservatism), アメリカ保守主義運動 (American Conservative Movement), パレオコンサーバティブ (Paleoconservative), ネオコンサーバティズム (Neoconservatism), リバタリアニズム (Libertarianism)

はじめに—問題の設定と研究の構想—

1. ロン・ポールとパレオリバタリアニズム

(1) パレオリバタリアンとしてのロン・ポール

本稿の主な目的は、戦後のアメリカの保守主義思想のいわば「オーソドクシー」としてレーガン政権の誕生に大きく寄与し、今日までアメリカの保守主義者たちにきわめて大きな影響力を行使してきたアメリカ「保守主義運動 (Conservative Movement)」の再検討に着手することである。また、その際に、この保守主義運動の敗者と捉えうる「パレオコンサーバティブ (Paleoconservative)」と呼ばれる保守主義者たちの存在に着目し、彼らの視点からこの再検討を試みてみたいと考えている。

ところで、昨年、筆者は、オバマ大統領に対してしばしば陰謀理論的で人種主義的とも解釈しうる激しい非難を浴びせている草の根右翼の実態を調査した。その拙稿の中で、近年、「パレオリバタリアン (Paleolibertarian)」のロン・ポール (Ron Paul) 共和党下院議員が、リバタリアン的な感性を抱く若者やイラク戦争に反対する反戦左翼からだけでなく、反国家主義的思想をもつ極右のミリシア活動家や陰謀理論家たちからも熱狂的な支持を引き出している事実を確認し、この事実を説明するための「ロン・ポールのヤヌス性」ともいべき仮説を導き出した¹。それ以来、この仮説を検証するべく調査を進めた結果、ロン・ポールの存在形態と彼が奉じる「パレオリバタリアニズム」という思想は、1955年頃に成立したとされる保守主義運動内部の権力闘争の実態、とりわけパレオコンサーバティブがなぜ敗者となってしまったのかという問いに回答することによってしか、適切な方法で理解することができないという結論に至った。

したがって、アメリカの保守主義運動を再検討するにあたって筆者が今後取り組むべき問いを考察し、筆者の今後の研究構想について明らかにするための以下の本稿序論において、まずロン・ポールの思想と政策について振り返るところから論を起こしたい。

さかのぼること、2008年のアメリカ共和党予備選挙において、パレオリバタリアンのロン・ポール共和党下院議員が予想外の強い支持を国民から集めたことに対してアメリカ・メディアの大きな注目が集まった。多くの若者が熱心にグラスルーツ・キャンペーンを行う姿も話題となった。ポールの政策の急進性を見れば、メディアが関心を寄せたのも無理はない。筆者の調査によれば²、たとえば、彼の国内政策は連邦準備制度の解体や内国歳入庁・教育省などの廃止を含むほとんどアナナルコ・キャピタリ

ストのそれであり、対外政策は極端な孤立主義（彼は自らの立場を「非介入主義（Non-interventionism）」と呼ぶ）であった。後者はプッシュ政権による戦争に対する徹底した批判はもとより、海外の米軍基地のドラスティックな撤退や軍縮、国連・世界貿易機関・北大西洋条約機構などの国際機関からの脱退、さらには愛国者法の撤廃などを含むものであった。

こうしたポールのきわめてラディカルな政策は、自由至上主義などと訳されるリバタリアニズムの主張として実は珍しいものではない。しかし、彼が人工妊娠中絶に反対し³、制限的移民政策と国境措置の強化を唱えるという一種の右派的態度をとっていることは、リバタリアンとしてかならずしもオーソドックスとはいえない。無論、リバタリアニズムは左翼アナーキズム⁴を除外したとしても、けっして一枚岩の思想ではない。しかしながら、個人の自由な選択を限りなく擁護し、国家権力による社会や市場への介入に徹底して反対する思想と理解されるのが一般的であって、その場合、妊娠中絶問題についてはプロ・チョイス、移民については非制限的な立場を主張しがちだからである。

（2）非主流派としてのパレオリバタリアニズム

ポールが単にリバタリアンではなく、しばしばパレオリバタリアンと呼ばれるのはこうした特異性に由来する。「パレオ」という言葉は「古い」という意味のギリシア語であり、パレオリバタリアニズムを直訳すれば、古いリバタリアニズムという意味である。そもそもパレオリバタリアニズムとは、晩年のマリー・ロスバート（Marry N. Rothbard）とルー・ロックウェル（Llewellyn H. Rockwell, Jr.）によって考案された一つの政治的主張である。それはリバタリアニズムをアメリカ保守主義における「伝統主義⁵」と部分的に和解させようとする試みであり、たとえば「ユダヤ・キリスト教的価値」などをアメリカの伝統として捉え、これに対しても一定の尊重を与えようとするものである⁶。

彼らが古いリバタリアニズムを自称するのは、ジェンダーや多文化主義などのいわゆる「社会問題」でより寛容な態度を示すより「リベラル⁷」で新しいリバタリアニズムと自分たちを区別しようとする意図もあると考えられる⁸。たとえば、1990年に主流派のリバタリアン系シンクタンクのケイトー・インスティテュート（Cato Institute）の所長エドワード・クレイン（Edward H. Crane）は、エスニシティや文化、あるいは性的な多様性に関する問題において、ロスバートとロックウェルの周辺には「不寛容な態度」が見受けられると批判したという⁹。これに対し、ロスバートはケイトー・インスティテュートなどの「左翼リバタリアン」からなる「公認の（official）

リバタリアン運動」は「右翼に対する激しい嫌悪」と「キリスト教に対するもっと激しい嫌悪」を抱くものだと非難しているのである¹⁰。この応酬によって、右派的なパレオリバタリアニズムと主流派で左派的なりバタリアニズムの違いがよくわかるのではないだろうか¹¹。実際、筆者の調査によれば、人種主義的な内容を含む差別的な記事を載せたロン・ポールのニュースレターが配布されたという過去が今回の選挙中にメディアによって暴露され、ポールが窮地に立たされた事件があった。そして、このニュースレターの筆者はパレオリバタリアニズムの創始者の一人であるロックウェルではないかと推量されている。ポールはヤヌスのような存在である。彼は平和主義的なメッセージをはっきりと発信することによって、通常のパレオリバタリアン的な有権者に加えて、リバタリアン的感性をもつ若者たち、イラク戦争に反対する一部の平和主義者や左翼などから熱狂的な支持を獲得し、大旋風を巻き起こすことができた。しかし同時に、アナルコ・キャピタリズムの主張を展開し、極右のみが理解しうる陰謀理論的なコードワードを駆使することによって、アメリカの政治と社会の現状に対し強い疎外感を抱きつつ、過激な反国家主義思想をもっているミリシアの活動家や極右的な陰謀理論家たちの強い支持をも獲得することができたのである¹²。

(3) ジョン・ランドルフ・クラブ合意の重要性

ーパレオリバタリアンとパレオコンサーバティブの連携ー

政治運動の系譜の観点から見ると、事態はより複雑となってくる。パレオリバタリアニズムという名称の由来は、80年代に先行して生まれたパレオコンサーバティブと呼ばれる人たちにちなんだ名称ではないかと考えられるからである。そして、実際に90年代以後、パレオリバタリアンとパレオコンサーバティブは密接に連携し合うようになった。重要なのは、この「パレオ再編成 (Paleorealignment)¹³」が単に思想上の出来事ではなく、政治活動の連携のための取り決めであり、事実、現実のアメリカ政治に大きな影響を及ぼすようになったということである。たとえば、これらの両勢力は90年代初頭におけるパレオコンサーバティブのパトリック・ブキャナン (Patrick Buchanan) による湾岸戦争反対のキャンペーンや彼の大統領選挙運動から始まり、近年ではブッシュ・ジュニア (George W. Bush) 政権による一連の戦争に対する反対運動、さらにはロン・ポールによる大統領選挙運動に至る幅広い政治運動を展開してきた¹⁴。また今日、オバマ (Barack Obama) 政権を批判するティー・パーティー運動でも無視できない役割を果たしているのである¹⁵。

パレオリバタリアンとパレオコンサーバティブの連携はいかに始まったのであろうか。後にパレオリバタリアニズムの創始者の一人となるロックウェルは1981年までロ

ン・ポールのもとでスタッフとして働いていたが、彼のもとを去った後、アラバマ州・オーバーンにフォン・ミーゼス・インスティテュート (Ludwig von Mises Institute) を設立した¹⁶。周知の通り、ミーゼス (Ludwig von Mises) はオーストリア学派の経済学の泰斗であり、亡命者として戦後アメリカのリバタリアン運動に大きな影響を与えた人物である。その弟子には、ハイエク (F. A. Hayek) やロスバードなどがあり、ロックウェルはロスバードの弟子であったから、フォン・ミーゼス・インスティテュートはパレオリバタリアニズムの拠点の一つとなっていた。またこの頃、ロックウェルはパレオコンサーバティブのパット・ブキャナンのCNNの番組クロスファイアに頻繁に出演するようになった。他方で、イリノイ州・ロックフォードにあるロックフォード・インスティテュート (Rockford Institute) には、トマス・フレミング (Thomas Fleming) やクライド・ウィルソン (Clyde Wilson) など、主として「サザン・アグリarian (Southern Agrarian)」によって影響を受けた「伝統主義者」たちが集結し、この研究所はパレオコンサーバティブの牙城となっていた。

1989年11月、ロックフォード・インスティテュートとフォン・ミーゼス・インスティテュートの共同のプロジェクトとして、両者の連携のための準備会合がロックフォードでとり行われた。両者の公式連携の最初の動きは「ジョン・ランドルフ・クラブ (John Randolph Club)」の結成であり、1990年の秋、ダラスで初会合が行われ、以下のことが合意された。すなわち、(1) 国益のみによって定義された対外政策、(2) 福祉国家のほとんどの要素に対する反対、(2) 公民権に関わる各種の用語と議論が地域および企業の自由に対し与える危険性、(3) 連邦レベルでの麻薬規制への反対であった。さらに翌年の第二回会合では、制限的移民政策に関する暫定合意が結ばれた。国益のみによって定義された対外政策を遂行しようとする彼らの共通の敵はネオコンサーバティブであり、ネオコンサーバティブの主張する「民主的価値」を流布するための「帝国」形成に反対することで合意した。一方、アナルコ・キャピタリズム的な思想をもつロスバードが福祉国家の解体を望むのは当然だとしても、パレオコンサーバティブは「官僚制的中央集権化」と「平等原則」という「脅威」を根拠に合意に至ったのだという。またパレオコンサーバティブが制限的移民政策を主張するのも驚くべきことではない。後述するように、彼らはアメリカの伝統を西洋文明の延長と捉え、急速に増大するメキシコなどの発展途上国からの移民の「脅威」からアメリカの伝統を保守しなければならないと考えるからである。ではなぜ個人の自由を至上のものとし、アナキストを自任するロスバードとロックウェルが制限的移民政策を受け入れたのであろうか。彼らの論理によれば、増大する移民は既存の福祉のメカニズムを利用するだけでなく、それを肥大化させる可能性が高いので、移民制

限は福祉国家解体論と一貫するというのである¹⁷。両者の間でもっとも問題となったのは自由貿易という争点であった。パット・ブキャナンに代表されるように、パレオコンサーバティブは自由貿易を絶対とは捉えず、とりわけ発展途上国との自由貿易に反対し、自国の産業を保護するべきだとする重商主義的立場をとるので、これは自由貿易を擁護するパレオリバタリアンと真正面から対立する議論である。しかしながら、パレオリバタリアンはナショナリスト的傾向があり、極端な孤立主義を信奉するため、国連すら脱退せよと主張する人々であるから、90年代のNAFTAやWTOの創設に際してパレオコンサーバティブとともに反対のための共同戦線を組むことができた¹⁸。

ここでもう一度、本稿の冒頭で筆者が説明したパレオリバタリアンのロン・ポールの政策を思い出していただきたい¹⁹。ポールがマリファナの連邦レベルでの規制を撤廃し、州にすべてまかせるべきだと主張したことも考慮に入れると、彼の政策は、90年から91年にかけてパレオリバタリアンとパレオコンサーバティブがランドルフ・クラブで一致した政策合意とほぼ重なることがわかるであろう。また本稿の冒頭で、ロン・ポールが、リバタリアンにもかかわらず、なぜ移民の制限と国境措置の強化に賛成するのかという疑問が示された。すくなくとも回答の一端はランドルフ・クラブにおける合意にあるといえるであろう。

この間、約20年の月日が経っている。この歳月を考慮すると、途中で紆余曲折があったにせよ、ランドルフ・クラブの合意の持続性には驚かざるを得ない。ロン・ポールの選挙戦の背景の一つには、このような政策合意とランドルフ・クラブから派生した人的ネットワークが存在していたと仮説をたてることができるであろう。そして、その人的ネットワークの中から、パレオコンサーバティブのブキャナンとパレオリバタリアンのポールという二人の大統領候補が現れて、二人とも大旋風を巻き起こしたということも確認できる。しかも、91年に勃発した湾岸戦争に対するブキャナンの反対運動から、近年のロン・ポールによるブッシュとオバマの戦争に対する反対運動に至るまで、彼らは民主・共和の両政権が遂行する戦争に対し反対の旗を何度も振り、主にネオコンサーバティブを軍事介入の扇動者だとして批判し続けてきたのである。たとえば、ジャスティン・ライモンド(Justin Raidondo)という人物がいる。彼はパレオリバタリアンとして「アンチ・ウォー・コム」というウェブサイトを主催しつつ、ブッシュ・ジュニアの戦争を批判し続けた。その彼が湾岸戦争直後に戦争反対の立場で執筆した著書『アメリカ右翼を再生する—保守主義運動の失われた遺産—²⁰』はネオコンサーバティブに対する批判の鋭さと先見性という意味で、まさにイラク戦争の預言の書といってよいと筆者は以前に指摘したことがある²¹。この本の前

文はパレオコンサーバティブのブキャナンが書いている。そして、約20年経ってライモンドはランドルフ・クラブの指導者の一人となり、自らの反戦サイトでパレオリバタリアンのロン・ポールの大統領選挙を支援した。このライモンドをめぐる20年間の人的ネットワークの重なり具合と首尾一貫したネオコンサーバティブ批判もまたパレオ再編成の性格をうまく物語るものであるといえよう。

(4) ネオコンサーバティブの台頭とパレオコンサーバティブの敗北

再び、パレオとは何であろうか。パレオとは古いというギリシア語であるが、その対義語は新しい(neo)である。パレオコンサーバティブと呼ばれる古い保守主義者が現れる以前に、ネオコンサーバティブと呼ばれる新しい保守主義者がすでにいた。パレオコンサーバティブとは、ネオコンサーバティブに対抗する文脈で発生した名称なのである。

周知の通り、一般に第一世代のネオコンサーバティブは30年代にトロツキストの周辺で活動していたか、戦後、反共リベラルだった人々であり、ユダヤ系知識人も多かった。彼らは転向者であり、戦後のアメリカ保守主義運動の新参者にすぎない。いまでも民主党所属のネオコンサーバティブは珍しくないほどである。この転向者たちは70年代から80年代にかけて次第に保守主義運動の中心の一角を占めるようになっていった。折りしも、ニューディール・リベラリズムが軋みの音を上げ始め、保守的主張に対しても資金が集まるようになって、保守系のシンクタンクが続々と立ち上げられることになった。ネオコンサーバティブへの資金の流れはきわめて豊富であった。パレオコンサーバティブの学者が人文系の学者である傾向が強かったのに対し、ネオコンサーバティブの学者は、ダニエル・ベル(Daniel Bell)やシーモア・マーティン・リップセット(Seymour Martin Lipset)、サミュエル・ハンチントン(Samuel Huntington)など、社会科学系の者も多かった。彼らは具体的な政策論ができた。従来よりも共和党が政権を担い始めたため、時代は政策論を必要としていた。こうしたことから、ワシントンのシンクタンクでもネオコンサーバティブは重宝される存在になった²²。

ネオコンサーバティブとは対照的に、80年代以降、一群の保守主義者たちが保守主義運動から追放されるか、自発的に離れるか、いずれにせよ、マージナルな立場へと追い込まれていった。保守主義運動の中でネオコンサーバティブとの戦いに敗れたのである。このいわば敗残者たちこそがパレオコンサーバティブと呼ばれる人々なのである。ネオコンサーバティブという呼び名は批判の文脈で作られたものであったとされ、ネオコンサーバティブだと自称するケースは少なかったといわれる。彼らとは対

照的に、パレオコンサーバティブたちは誇りをもってこの名を使っているようである。ネオコンサーバティブなど新参者で、自分たちこそがより古くから存在する真正の保守主義者であると主張するかのようにそうしているのである。

実は、パレオリバタリアンも、別の意味で敗者であった。たとえば、パレオリバタリアニズムの創始者のロスバードはアカデミズムの世界での評価とは別に、政治活動家としてはやはり敗者の人生だったといえる。彼は50年代初頭の冷戦が激化し、反共主義が広まっていく時代に頑固に孤立主義を主張し続け、保守主義運動から異端者として追放された²³。60年代末から活発化していったリバタリアン運動はロスバードにとって「左翼リバタリアニズム」であって、パレオとは言い難かったこともあり、運動から離れざるを得なくなった。前述したように、彼はこうしたリバタリアン運動を「公認のリバタリアン運動」だと揶揄している。しかしながら、この揶揄が意味するのは、ケイトー・インスティチュートなど、大金を集めることのできるワシントンの華々しい主流派リバタリアンの世界には彼の居場所がないということでもある。

パレオリバタリアンのフォン・ミーゼス・インスティチュートとパレオコンサーバティブのロックフォード・インスティチュートが連携し、ジョン・ランドルフ・クラブを結成したという点、いかにも華やかなシンクタンクのエリートたちの世界の出来事に聞こえるかもしれない。しかし、これらの二つのシンクタンクの本部の所在地を思い出してほしい。フォン・ミーゼス・インスティチュートがアラバマ州という反ヤンキー的な風土を誇るディープサウス、またロックフォード・インスティチュートはかつて孤立主義の牙城であったイリノイ州というハートランドにそれぞれ本拠地を構えているのであって、同じシンクタンクといっても、ワシントンやニューヨークのような政治とメディアのエリートの世界とは程遠い地域に所在するのである。しかも、パレオコンサーバティブの政治学者であるポール・ゴットフリード (Paul Edward Gottfried) によれば、パレオ再編成の時期、パレオコンサーバティブの実態は次のようなものだったという。彼らは主要な資金源がたたれ、保守系の雑誌などにも執筆するのが困難になっていった。特に保守主義運動に最大の影響力を行使している『ナショナル・レビュー (National Review)』誌から締め出されたことが大きかった。そこで、ロックフォード・インスティチュートは連携して活動する団体を求めざるを得なくなった。その結果、たどり着いたのがパレオリバタリアンのフォン・ミーゼス・インスティチュートであった。このような経緯もあるので、パレオ再編成が行われたとき、「以前にお見合いに失敗して、もう白髪になってしまったパートナー同士の縁組」だと陰口をたたかれたそうである²⁴。

(5) 研究の構想

ここに見出される構図は次のようなものであろう。後述するように、戦後、『ナショナル・レビュー』創刊の55年に概ね出発した保守主義運動ははじめてバリー・ゴールドウォーター（Barry Goldwater）に自分たちの信ずる保守主義の体现者を見出した。しかし、64年のゴールドウォーターの大統領選挙では手痛い敗北を喫する。保守主義運動は70年代頃から本格的にネオコンサーバティブと連携し始め、81年にレーガン政権を誕生させてはじめて念願のワシントンの中樞を掌握することができた。また彼らはこれによっではじめて共和党の主流派の地位を得た。それ以来、今日に至るまで国家権力と大規模な資金源へのアクセス権を多かれ少なかれ握り続けている。これに対して、パレオコンサーバティブは、保守主義運動が国家権力をまさに掌握した80年代に運動から追放された敗残者たちである。彼らは、90年に同じく敗者のパレオリバタリアンたちと連携し、ジョン・ランドルフ・クラブで政策合意に至った。以来、彼らは資源の不足にもかかわらず、パレオコンサーバティブのブキャナンとパレオリバタリアンのロン・ポールという大統領候補を世に出し、アメリカのハートランドやディープサウスから、ワシントンやニューヨークに敵意を抱く反エリート主義的で草の根的なポピュリズムのメッセージを発して、共和党主流派の大統領候補に冷や汗をかかせることには成功した。またことあるごとにネオコンサーバティブと保守主義運動の中核を批判し続けている。彼らは資源と手勢が少ないから、現状に不満をもって、反国家主義的な考えをもつものであれば、ミリシア信奉者であろうが、陰謀論者であろうが、根こそぎ動員して政治活動を行ってきた。パレオコンサーバティブとパレオリバタリアンたちが極右のミリシアの信奉者や陰謀論者たちと同じだとするのは不正確であるが、ワシントンの主流派の世界に疎外感を抱いているという意味では両者には共通性がある。

前述したように、筆者はかつてオバマ政権に対する草の根右翼の激しい非難の実態を調査し、パレオリバタリアンのロン・ポールのヤヌス性ともいえるべき仮説を形成して以来、これを検証するべく調査を進めてきたが、その結果としてたどり着いたのが以上の構図である。この構図をロン・ポールの選挙と関係づけて要約するならば、それは、保守主義運動がネオコンサーバティブと連携し、この両者が勝者となる一方、敗残者となったパレオコンサーバティブは同じく敗者であるパレオリバタリアンと連携した。そしてこの敗者連合がワシントンの勝者連合に対してしかけた一つのポピュリズム的な戦いがポールの大統領選挙戦であった、という解釈が成り立つであろう。

もう一つ調査でわかったのは、アメリカの保守主義運動は、正統な保守主義とは何であるかという「保守主義のオーソドキシシー」を定義する力をもっており、このオー

ソドキシーから逸脱する者をあたかもローマ法王庁のようにしばしば異端者として処罰し、運動から追放する場合があるということである。パレオコンサーバティブはまさにそのような方法でマージナルな存在へと追い込まれたのである。またアメリカの保守主義運動は、オーソドキシーを掌握し続けるために、保守主義運動の歴史を書き換え、自分たちに都合のよいいわば正史を生み出してきたことも確認できた。そして、後述するように、敗残者となったパレオコンサーバティブは、まさにこの正史の書き換えを要求していることもまた明らかにされるであろう。筆者の研究のアイデアは、パレオコンサーバティブという敗者による正史への挑戦に着目することで、敗者の解釈と勝者の正史を比較しつつ、そこから見えてくる保守主義運動の実像を確認してみたいというものである。

このような意味で保守主義という政治的用語の意味内容は、けっしてアプリオリに定義できるものではない。それは、保守主義運動内部においてどのような思想がオーソドキシーの地位を獲得するのか、その思想の体現者は誰なのか、したがって誰が運動のヘゲモニーを握るのか、そして誰を異端者として追放するのかという政治闘争と抜きがたく結びついている。しかも、アメリカの保守主義運動が狭義の政治運動である以上、最終目標は国家権力を掌握することに置かれる以外にないのであるから、今日の議会制民主主義を与件とした場合、保守主義者たちは政治的な支持を増大させるためにイデオロギーの異なる他の政治運動との競合関係において自らを不断に再定義しつつ、その思想の政治的正統性をめぐる闘争を遂行することになるであろう。またこのようなプロセスの中で正史が構築されていくことになる。そして、戦いの敗者こそが正史に挑戦していくといえるであろう。

こうして、筆者の研究の構想は、主に1930年代から90年代初頭までのアメリカ保守主義のオーソドキシーをめぐる政治闘争に着目するという観点から、保守主義運動の敗者となったパレオコンサーバティブ、とりわけこの政治運動にコミットしている学者やジャーナリストなどの広義の知識人を研究対象の中心にしつつ、主として彼らの自己認識を調査することによって、パレオコンサーバティブの実態を歴史的かつ経験主義的に検討するというものである。そして、このような限られた視点からではあるが、併せてアメリカの保守主義運動の再検討を試みてみたいのである²⁵。

第1章 パレオコンサーバティズムの特徴とその保守主義運動再解釈の要請

1. 『ナショナル・レビュー』創刊時におけるアメリカ保守主義の主要な知的傾向

(1) 『ナショナル・レビュー』創刊とフュージョニズム

本章ではまず、パレオコンサーバティズムの特徴について確認する前提として、アメリカ保守主義運動のオーソドキシについて概観したい。

アメリカ保守主義運動は第二次世界大戦後の産物に過ぎない。「1950年代以前には、アメリカには保守主義運動というようなものは存在していなかった²⁶」。保守主義運動が明確に一つの政治的勢力として存在するようになったのは冷戦の激化が最大の直接的な背景であり、保守主義運動はこの文脈において1955年11月9日にウィリアム・バックリー・ジュニア (William F. Buckley, Jr.) によって創刊された保守主義の雑誌『ナショナル・レビュー』が中心となって生まれたということは多くの論者が一致するところである²⁷。そして、「バックリーは1960年代までにはまさにアメリカ保守主義の顔と声 (the face and voice) となった²⁸」という。またアメリカ保守主義運動の知識人に関するスタンダードともいべき歴史をものしたジョージ・ナッシュ (George H. Nash) は、「1955年以降のアメリカにおける知的な (reflective) 保守主義の歴史は、ウィリアム・F. バックリー・ジュニアの創設した雑誌で協力し合った人々かこの雑誌が発見した人々の歴史といっても過言ではない (to a very substantial degree)²⁹」とすら述べている。確かに明確な抽象的イデオロギーの構築を厳しく戒めるエドモンド・バーク (Edmond Burke) 以来の保守主義の伝統やアメリカ保守主義の定義を拒むその「変幻自在な性格³⁰」という特徴のゆえに、アメリカ保守主義の定義や分類がきわめて難しいものであるとの指摘が多くなされている。しかし、フランク・マイヤー (Frank S. Meyer)³¹を中心とする『ナショナル・レビュー』の知識人たちが後に「フュージョニズム (Fusionism)」と呼ばれる立場へとまとめ上げていく保守主義のオーソドキシの主要な知的構成要素については、先行研究においてかなりはっきりした合意がある。それは、「リバタリアニズム」、「伝統主義 (Traditionalism)」、「反共主義」の三つである³²。

(2) 『ナショナル・レビュー』創刊時におけるアメリカ保守主義の主要な知的傾向

アメリカ保守主義の最大の特徴は、個人の自由や私的所有権、自由な市場経済を擁護し、夜警国家的な国家観を採用するリバタリアニズムの色彩が濃厚であるという点

にある。これは古典的自由主義、あるいは消極的自由の立場といってもよい。一方、アメリカの保守主義の文献の中で伝統主義とよばれている立場は、典型的には、アメリカにおけるパークの継承者を自任していたラッセル・カーク（Russell Kirk）に代表される思想である。それは、人間の不完全性に対する洞察に基づく革命的変革への非難、したがって伝統および宗教の重視といった特徴を持つものである。また以下で述べるように、戦後の保守主義運動ではカトリック保守派による伝統主義への影響も強い³³。最後に、反共主義とは、この場合、単に共産主義を好ましくないと判断するような穏健な立場ではなく、国内的にはマッカーシズムを支持し、国際的には軍事力による共産圏の人々の解放を唱えるような非常に強い意味での反共主義である。この意味で、『ナショナル・レビュー』のリバタリアニズムは軍事・安全保障政策を除外したものであって、反共主義による軍拡がもたらす国家権力の肥大化はこれを許容するという点で前述した孤立主義者・ロスバードのリバタリアニズムから見れば、不徹底なものと批判される余地があったことは重要である。またこの彼らの強烈な反共主義の傾向は『ナショナル・レビュー』に関係する知識人にマルクス主義からの転向者とカトリック保守派が顕著に見られたことと無関係ではない。後のネオコンサーバティブと同様に、ジェームズ・バーナム（James Burnham）、マイヤー、ウィタカー・チェンバース（Whittaker Chambers）などは転向者としての反動で熱狂的な反共主義者となっていった³⁴。バックリー、彼の義理の兄弟のプレント・ボゼル（L. Brent Bozell）やバーナムなどはカトリックであり、カークやマイヤーといったカトリックに改宗した者も多かった。またジョセフ・マッカーシー（Joseph Raymond MacCarthy）もカトリックであり、マッカーシズムにはカトリックの支持者がかなり見られ、東欧共産政権下でのカトリックへの迫害に関するピウス12世による発言と相俟って、カトリック、特にその保守派はアメリカの自由をヨーロッパにおけるキリスト教、とりわけカトリックとマルクス主義の戦いの文脈で捉えがちであった³⁵。

こうして『ナショナル・レビュー』の知識人たちは、個人の自由と伝統・宗教とは相互補完的なものであり、個人の自由を否定し無神論的な立場をとる共産主義に対してはリバタリアニズムと伝統主義の共通の敵として徹底的に戦わなければならないと主張していくことになる。そして、このような立場は、前述したように、フュージョニズムと呼ばれることになるのであるが、この立場こそが戦後アメリカ保守主義運動のオーソドキシシーとなっていった。バックリーたちはこのようなオーソドキシシーを旗印に保守主義運動を生み育て、レーガン政権の誕生によって共和党の主流派の地位を占めるに至った。そしてこうした経緯によって今日に至るまでこの運動に強力な影響力を及ぼすことができた。フュージョニズムには弱点があり、リバタリアニズム、伝

統主義、反共主義の間には潜在的に深刻な矛盾が内在していたのであるが³⁶、それにもかかわらず、彼らはちょうど共産党やローマ法王庁のような立場から『ナショナル・レビュー』以前やそれ以後の好ましくない思想を異端と認定することができたのである³⁷。

2. パレオコンサーバティズムによるアメリカ保守主義運動史の再解釈の要請

前述したように、80年代にパレオコンサーバティブと呼ばれることになる人々は、ほとんどの場合、以前はこの保守主義運動の内側で活動するインサイダーであった。しかし、80年代にパレオコンサーバティブとネオコンサーバティブの間の対立が発生した頃に彼らは保守主義運動の主流派から離れるか、そこから事実上追放される憂き目にあった。彼らは、ネオコンサーバティズムに対する激しい批判を展開したが、それと同時に、ネオコンサーバティブを保守主義運動の中核に招き入れた『ナショナル・レビュー』を中心とする保守主義運動に対し批判の目を向けるようにもなった。その程度は論者によってさまざまであったが、彼らは保守主義運動の元インサイダーであるという特異な視点から従来の保守主義のオーソドキシシーを批判的に検討し、さらに保守主義運動に関する正史の読み替えを行うようになった。

この試みに関連する学術的な著作としては、ポール・ゴットフリードやグレゴリー・シュナイダー (Gregory L. Schneider) などの考察³⁸があるが、たとえば、彼らは『ナショナル・レビュー』以前の「オールドライト (Old Right)³⁹」と呼ばれる保守主義を再評価しようと試みているのが確認できる。ゴットフリードは次のように述べる。保守主義の立場から書かれたジョージ・ナッシュによるきわめて影響力ある著作『1945年以降のアメリカにおける知識人の保守主義運動⁴⁰』では、アメリカ保守主義が戦後になってやっと真剣な考察に値する存在となったとされ、またその際に中欧からの亡命知識人の役割が大きかったと分析されている。確かに亡命知識人の役割は重要であるものの、ナッシュの考察は『ナショナル・レビュー』によって「50年代に構築された総合 [フュージョニズム] というプロクロスステスの寝台には収まることのない、アメリカで内発的に発生した豊かな保守主義の諸伝統を軽視」する結果に陥っている。パレオコンサーバティブは自らの知的源泉をこのプロクロスステスの寝台に求めるべきではなく、「かならずしも保守主義の旗を掲げてはいないより古い伝統や運動」を検討する必要があるという⁴¹。またゴットフリードは以下のようにも述べる。ネオコンサーバティブとの戦いに敗れ、「アメリカ右翼から追放された身」として、ますます雑誌に執筆する場を奪われるようになったが、この異端を排除する手法はすでに50年代から遂行されていたと見るべきなのではないか。保守主義運動にとって好

ましくない「過激派 (Extremist)」と烙印を押された者たちは、ほとんどの場合、「保守主義運動が……実行した歴史の書き換えの犠牲者」ではなかったのか⁴²。このようにゴットフリードはアメリカ保守主義運動史をその出発点から再検討するべきだと主張しているのである。ただし、彼はパレオコンサーバティブの中でこの点に関してもっとも急進的な立場をとる一人であり、保守主義運動の歴史の再検討を要請するその程度は論者によってまちまちである。たとえば、ニューライトにも分類されるサミュエル・フランシス (Samuel Francis) は保守主義運動創設時の指導者たちの意図までは疑わず、運動は労働者や農民や小事業者などの「ミドル・アメリカ」から乖離していたために次第に腐敗していったのであり、事態を打開するために、むしろジェイムズ・バーナムやウィルモア・ケンドール (Willmoore Kendall) といった保守主義運動第一世代の考察を参考にして、ポピュリズム的戦略を採用するべきであるという立場である⁴³。パット・ブキャナンの場合は、レーガン政権の高官であったという経歴に影響されてか、保守主義運動はレーガン政権まではまともであったと捉えている⁴⁴。このように程度の差はあるものの、パレオコンサーバティブは、総じてアメリカ保守主義運動史の再解釈に取り組むようになったといえる。

3. パレオコンサーバティズムの特徴

(1) ネオコンサーバティブ批判の激しさ

パレオコンサーバティズムの特徴を考察するには、パレオコンサーバティブによるネオコンサーバティブへの批判の確認から出発するのが有益である。たとえば、ミシガン大学のステファン・タンサー (Stephen Tonsor) は86年にネオコンサーバティブの最重要人物であるアービング・クリストル (Irving Kristol) たちを面前にして次のように言い放ったという。「街の娼婦が信仰に目覚めて教会に通うようになったのは結構なこと」だが、「たまにうまく合唱の指揮ができるからといって、娼婦が牧師に日曜の礼拝で何を語るべきか指示し始めたら、それは行き過ぎってものだ⁴⁵」。これは第一世代のネオコンサーバティブの多くが極左マルキストやリベラルからの転向者であったという事実を痛烈に揶揄したものであろう。あるいは、パット・ブキャナンの発言はどうであろうか。彼による91年の湾岸戦争への反対と翌年の共和党大統領予備選挙参戦こそがパレオコンサーバティブとパレオリバタリアンが共同して本格的政治活動を行うきっかけであったが、彼はテレビの政治討論番組で湾岸戦争に反対して次のように述べたという。「中東の戦争賛成と騒ぎ立てているのは二つのグループ、イスラエル国防省とアメリカ内部のイスラエルの熱心な信者席 (Amen Corner) だけだ。……イスラエル人 (the Israelis) はこの戦争を何が何でも起きてほしいと望んで

いるが、アメリカにイラクの戦争マシーンを破壊してもらいたいからだ。……彼らは我々とアラブ世界の関係がどうなってもかまわないのだ⁴⁶」。この発言は、ネオコンサーバティブにユダヤ系の知識人が顕著である点に注目し、アメリカ内部のいわゆる「イスラエル・ロビー」が「イスラエルの国益」の実現のために「アメリカの国益」を犠牲にしているとする議論である。ブキャナンなどのパレオコンサーバティブやパレオリバタリアンたちが9.11同時多発テロ事件後のイラク戦争に際しても、ブキャナン自らが創始者の一人となったパレオコンサーバティズムの雑誌『アメリカン・コンサーバティブ』(*The American Conservative*)」などにおいて同様の激しいイスラエル・ロビー批判を展開していたことは記憶に新しい。もちろん両方のケースにおいてイスラエル・ロビーからパレオコンサーバティブとパレオリバタリアンは反ユダヤ主義者だとする激しい非難が放たれたのはいうまでもない。それにしても、パレオコンサーバティブとネオコンサーバティブの間の応酬はこの種の毒気をはらんでいることがあまりに多い。これによって、パレオコンサーバティブとネオコンサーバティブの対立がいかに激しいものなのかが確認できたかと思われる⁴⁷。

(2) パレオコンサーバティズムの特徴(1) —安全保障政策—

パット・ブキャナンの発言からわかるように、パレオコンサーバティズムの大きな特徴は、とりわけ冷戦の終結によってソ連という強大な敵が消滅した後に顕著になるのであるが、海外の米軍基地の撤退を含むアメリカの海外のコミットメントの大幅な縮小や湾岸戦争などの軍事介入反対の立場といったその孤立主義的傾向である。前述したナショナル・レビューが体現する保守主義のオーソドクシーを思い出していただきたい。それは、強力な軍事力の行使を背景にした極端な反共主義であった。彼らは冷戦終結後も、概ね積極的な軍事介入の立場を維持してきている。その意味で、パレオコンサーバティズムは、保守主義のオーソドクシーから完全に逸脱しているといえる。彼らが自らの伝統として参照するのは、『ナショナル・レビュー』が保守主義の異端であると規定し、保守主義運動の正史から追放した、戦間期から戦中においてルーズベルトの軍事介入に反対したいわゆるアメリカ・ファースターと呼ばれるオールドライトであり、さらにさかのぼれば、初代大統領ワシントン以来の孤立主義の伝統なのである。

(3) パレオコンサーバティズムの特徴(2) —国内政策—

しかも、彼らの認識によれば、軍事介入という手段が問題であるだけではなく、ネオコンサーバティブと彼らとますます主張が重なるようになったとされる『ナショナル

ル・レビュー』による軍事介入正当化のための理念も重大な問題をはらんでいると捉えられた。たとえば、ゴットフリードによれば、ネオコンサーバティブは多様な主張を内包するものであるが、すでに80年代においてその理念は概ね「グローバルな民主的秩序」や「グローバルな民主的革命」のヴィジョンであった⁴⁸。ブキャナンはイラク戦争批判の文脈においてこのようなヴィジョンは保守主義の要請する賢慮（Prudence）を欠いている点で保守主義とは言えず、民主主義を「世界大の道徳的十字軍」へと転換する「新たなジャコバニズム」であるとして伝統主義的な視点から批判を展開している⁴⁹。

しかし、ここで注目したいことは、パレオコンサーバティブのこうした見解が望ましい国内社会に関する彼らのヴィジョンと密接に結びついていた点である。そのヴィジョンとは、一言で言えば、伝統主義の一種である。すなわち、彼らは民主主義に対して懐疑的である。彼らにとって機会の平等すら謬見であり、それは結果の平等にかならず結びつくものであって、たとえば、法の下での平等のみが首肯しうるものである。伝統主義はこのような民主主義、平等といった普遍的な価値を想定することには懐疑的である。むしろ重要なのは、「地域—そして国民—の歴史、文化、遺産、文学、英雄、あるいは神話」を再発見することであり、またそうした特殊な伝統に内在する固有の社会階級や男女間の差異を尊重する態度である。しかも、彼らにおいては、アメリカ社会の伝統は「西洋文明の延長」と捉えられる。したがって、発展途上国からの移民の大量流入に対し反対の立場をとるし、多文化主義は誤りであるとする。伝統を解体する可能性のある無制限の自由貿易に対しても反対する。民主的平等の原則が、各種の福祉・アフターマティブ・アクション・さまざまなマイノリティの権利への期待を高め、国家の肥大化をもたらすことを恐れる。彼らは移民流入の阻止や重商主義的貿易政策の推進ために国家が社会に介入することはいとわないが、福祉国家のほとんどの要素はこれを認めない。彼らにとってリベラルな方向へと社会改良を進める福祉国家の肥大化は伝統に含まれる差異や地域の文化を破壊するものと捉えられた。中西部出身でパーク主義者であり、イギリスとアメリカの歴史を連続するものとして伝統主義を説いたカークの思想も重要であるが、パレオコンサーバティブにとってとりわけアメリカ南部の伝統が重要な要素となってきた。前述したように、パレオコンサーバティブの牙城となったロックフォード・インスティテュートはサザン・アグリアンという南部的背景をもつ伝統主義のメッカなのである。この思想は戦間期に生まれたものであり、『ナショナル・レビュー』以前のオールドライトの思想であった⁵⁰。

4. 戦前のアメリカにおける保守主義運動の不在と「保守主義」の登場

(1) 戦前のアメリカにおける保守主義運動の不在

前述したように、たとえば、ゴットフリードの場合、特に顕著なのであるが、パレオコンサーバティブは保守主義運動のオーソドキシシーを疑い、『ナショナル・レビュー』創設の1955年以前のオールライトに着目せよと主張した。しかしながら、そもそもなぜ『ナショナル・レビュー』創刊以前にアメリカに保守主義運動が存在しなかったのであろうか。アメリカにおけるこの保守主義運動の不在はけっして当たり前のことではない。フランス革命に対する反動として伝統を擁護したバーク以来、欧州ではさまざまな種類の保守主義勢力が、革命的変動を引き金として定着していったのである。またアメリカと同様、自由主義の伝統が強いイギリスでは保守党が確固たる地位を築いていた。この保守主義運動の不在といういわばアメリカ例外論のケースが生じた最大の原因は、ルイス・ハーツ (Louis Hartz) が指摘したように、結局、アメリカが封建制や絶対王政などを持つことがなく、生まれながらにしてブルジョア社会であったため、革命を必要としなかったという点にある⁵¹。つまり、アメリカ社会においては、保守すべき存在は、危機に陥った貴族制などではなく、ブルジョア的な個人主義、私的所有制、自由な市場経済、制限された政府などであった。この知的傾向は、前述した保守主義の三要素の中のリバタリアニズムに相当する。しかし、こうしたブルジョアの自由主義は、アメリカ社会においてあまりに支配的な地位を築いてきたため、危機に陥ってそれを保守するという知的態度を惹起することなく、長きにわたって保守主義としてではなく、単に自由主義 (Liberalism) として理解されてきたのである。

(2) ニューディール・リベラリズム下における「保守主義」の登場

このような自由主義が危機に直面し、保守されるべきものとして明確に自覚されるきっかけとなった大事件が、大恐慌を背景に33年に成立したフランクリン・ルーズベルト民主党政権によるニューディール政策であった。周知の通り、ニューディール政策はアメリカにおける本格的な福祉国家の始まりであり、企業家たちの抵抗にもかかわらず労働組合の権利を認め、しかもケインズ主義的な総需要政策をシステムティックに実行し始めたというものである。こうした行政国家の肥大化は革新主義時代、また第一次世界大戦を通じて徐々に進んでいたが、これほどまでのドラスティックなものではなかった。この事態を個人の自由への脅威、とりわけ所有権の侵害と捉える人々が現れた。また彼らにとってこれは憲法秩序の破壊であった。彼らはアメリカで

のこの展開をファシズム、共産主義と同質の全体主義とみなしていった。福祉国家を推進するリベラリズムを共産主義や全体主義の延長とみなすという今日でもアメリカ保守主義によく見られる発想はここから出発したといつてよい。こうして保守主義としてのリバタリアニズムが生まれたのである。

また第二次世界大戦の勃発、さらに真珠湾攻撃によってアメリカは本格的な軍事介入に着手していった。ウッドロウ・ウィルソン民主党大統領による第一次世界大戦への参戦がその前哨戦であったが、ルーズベルトの参戦によって、古きよき孤立主義の時代は完全に覆された。孤立主義を守ろうと、ルーズベルトの戦争に徹底して反対した人々がいた。アメリカ・ファースターとよばれる人たちである。ここに孤立主義としての保守主義がはっきりと姿を現したのである。伝統主義者も存在していた。本稿の文脈で重要なのは、前述したサザン・アグリリアンである。彼らはパレオコンサーバティブの主要な知的源泉であり、南北戦争後、北部の「産業主義 (industrialism)」の浸透によって蹂躪された南部の農村の地域的な伝統や州の自律性を守りたいと考える反近代主義的な思想の持ち主であった。一方、ルーズベルト政権下においては、以上の勢力に加えて、ファシズムなどを信奉する極右勢力も出現した。しかしながら、彼らは限定的な規模と影響力しか獲得できなかった。

パレオコンサーバティブがオールドライトに注目せよという場合、どこまで時代をさかのぼるかはまちまちだが、彼らは海外への軍事介入が当たり前ではなく、伝統が重視され、市場が自生的に秩序を決め、所有権が尊重されていた、あの古きよき共和国に帰ろうというイメージを抱いている。その意味で、オールドライトの保守主義とはニューディールによる大規模な変化に対して失われたものを保守したいとする初歩的な保守主義的態度であろう。実は、ニューディール以前に戻りたいという感情は、孤立主義という要素が反共主義によって取って代わられた点を除けば、戦後の多くの保守によっても共有されることになった。その意味で、大恐慌と第二次世界大戦という第一の危機がルーズベルト政権に始まる経済・財政問題におけるニューディール体制と対外政策におけるいわゆる国際主義とを生み出し定着させていったとすれば、この両者への反動としてオールドライトが発生したのであり、さらにこのオールドライトが第二の危機である冷戦の勃発によって反共軍事主義的方向へと変容して『ナショナル・レビュー』の保守主義運動となり、戦後の保守主義を長らく規定していったといえる。またこの文脈においてパレオコンサーバティブは、このような経路依存性をもって今日の保守主義者たちをいまだかなりの程度拘束している保守主義運動の呪縛から逃れようと試みていると解釈することが可能である。そして、このために彼らが選んだ手段の一つこそが、オールドライトの再評価だったと言えるのである。

このようにして、アメリカの自覚的な保守主義の多様な要素がルーズベルト時代に本格的に出現した。しかしながら、当時、戦後60年代末までアメリカの支配的潮流となるニューディール・リベラリズムの圧倒的な力のもとにあって、保守主義者たちは反撃を開始したが、総じて弱々しい存在でしかなかった。彼らは連携して有効な保守主義運動を展開するには至らなかったのである⁵²。

おわりに

しかし、このこと以上に重要なのは、実は、彼らがかならずしも自らを保守主義者として規定すらしていなかったということである。むしろ自分たちこそ、真の自由主義者であると信ずるものも多かった。ニューディール期になって、消極的自由を意味する自由主義 (Liberalism) という言葉が、今日、リベラリズムと日本語で表現される意味内容、つまりいわゆる積極的自由を意味するものへと本格的に変わっていくのであるが、まだその決着がつけられたわけではなかった。驚くべきことに、『ナショナル・レビュー』創刊の年の55年の直前まで、バックリーは自らを保守主義者としてではなく、リバタリアンと呼んでいたという。また1954年の時点において、バックリーの協力者で後にフュージョニズムという戦後保守主義のオーソドキシの考案者ともなるマイヤーは保守主義という名称を共産主義なども意味する「集産主義」と同一視していたというのである⁵³。そればかりではない。今日、多くの論者が保守主義の柱の1つとしてリバタリアニズムという用語を使用しているが、これさえも、自由主義という用語がリベラルによって奪われたために、多くの人々が使い始めたに過ぎないものだという⁵⁴。

この時期、『ナショナル・レビュー』は存在せず、したがっていまだ保守主義のオーソドキシを定義し、異端を排除する機関は存在しなかった。フュージョニズムのような正統な組み合わせに関する思想もいまだなかった。今日、保守主義とみなされないものも含め、保守主義の候補となりうるさまざまな思想や知的傾向が存在していた。しかし、何が保守主義で何が“liberalism”か、ははっきりとは決まっていなかった。「かならずしも保守主義の旗を掲げてはいないより古い伝統や運動」に着目すべきだとするゴットフリードの前述した言葉はこうした状況を念頭に置いたものであろう。しかしながら、大きな変革を厭い、失われようとする秩序を守ろうとするのが保守であるとすれば、ニューディール以前に戻ろうというのが保守主義であった。その意味では保守主義的な態度は明らかに存在していた⁵⁵。しかし、当時、保守主義という言葉で自分の思想を規定しようとする人々がまだすくなくった事実は残る。たとえば、当時の保守ないし右翼は孤立主義者であるというのが保守主義運動に関する現在の研

究の一般的な見方であるが、それは、リベラルのルーズベルトと左翼のアメリカ共産党がともに戦争支持で協力し合う関係であったから、このこととの関係上、戦争反対は保守主義か右翼だとみなされていった側面もあるのかもしれない。事実、今日、ネオコンサーバティブの中には、「リベラル」のルーズベルトに偉大な保守主義の大統領を見出す人々がいるのである。この時代、何が保守主義なのかということすら、誰もはっきりとは知らなかったといつてよい。パレオコンサーバティブが注目せよと要請するオールドライトの時代とはそのような時代であった。次稿では、このような視点にたちつつ、パレオコンサーバティブの提示する保守主義運動に関する歴史修正主義について、これを保守主義のオーソドクシーを含めたその他の見解と慎重に比較検証しながら、その再検討を試みてみたい。

注

- 1 漆畑智靖「最近のアメリカにおける右翼運動の現状に関する一考察—オバマ大統領への陰謀論的非難のケース・スタディー—」『恵泉女学園大学紀要』第22号、2009年。
- 2 同上、115-7頁。
- 3 厳密には、ポールはプロ・ライフが望ましいと主張しているが、政策的には人工妊娠中絶の是非は州の決定に任せるという立場である。
- 4 左翼アナキズムをリバタリアニズムに含むという考え方もある。たとえば、以下を参照されたい。Murray Bookchin, *Social Anarchism or Lifestyle Anarchism: An Bridgeable Chasm*, AK Press, 1995; ジョージ・ウッドコック著 (白井厚訳) 『アナキズム I—思想編一』紀伊國屋書店, 1968年。本稿ではこうした思想を除外してリバタリアニズムを考察する。
- 5 アメリカ保守主義における伝統主義については、本文76頁を参照されたい。
- 6 Joseph Scotchie, "Introduction: Paleoconservatism as the Opposition Party," in Joseph Scotchie ed., *The Paleoconservatives: New Voices of the Old Right*, Transaction Publishers, 1999, p. 4.
- 7 リバタリアニズムが左翼, 右翼, あるいはリベラル, 保守という図式には収まりきらないという見解については、以下を参照されたい。デイヴィット・ボウツ著 (副島隆彦訳) 『リバータリアニズム入門—現代アメリカの〈民衆の保守思想〉』洋泉社, 1998年, 46-51頁。
- 8 政治運動としてのリバタリアニズムが民衆レベルではじめて活発化したのは、60年代の学生運動の時代である。ニューレフトの時代とみなされてきたこの時期は、実は、「民主社会を求める学生同盟 (以下, SDSとして言及)」のみならず、リバタリアニズムを含む保守主義の側の学生運動もきわめて盛んであった。この軽視されてきた側面を考慮しつつ、当時の学生運動の全体像を修正する研究が盛んになっている。SDSの右翼版はウィリアム・バックリーの肝いりで結成された「自由を求めるアメリカ青年団 (Young Americans for Freedom)」(以下, YAFとして言及)であった。このYAFのリバタリアン派がベトナム戦争反対の立場をとるようになり、保守主義運動から独立してリバタリアン運動を発展させていくのである (たとえば, 注11のケイトーのボウツはYAF出身である)。また当時, YAFのリバタリ

アンの多くはカウンターカルチャーを受容していったが、カトリック教徒が多い YAF の伝統主義派はカウンターカルチャーに強い嫌悪感を示す傾向が強かった。このエートス面での対立はベトナム問題と相俟って、両者間の亀裂を広げていき、YAF は分裂した (Rebecca E. Hatch, *A Generation Divided: The New Left, The New Right, and The 1960s*, University of California Press, 1999, pp. 97-157, pp. 186-238.)。ロスバードは、この時期、こうした若いリバタリアンとともに、ニューレフトとの間の反戦のための連携を模索するが、挫折した。その後、ロスバードによって後に「左翼リバタリアン」と揶揄されることになる「公認のリバタリアン運動」が急速に発展していく。ロスバードは当初熱心にこの組織活動に取り組むものの、結局、ここからも離反せざるを得なくなり、大きな挫折を味わうことになった。その意味でロスバードが「左翼リバタリアン」を批判し、自らをパレオリバタリアンと称する一因は、ヒッピー的なリバタリアンに対する嫌悪感、突き詰めれば、近代のブルジョア的の道徳を否定するカウンターカルチャーに対する彼の嫌悪感にあったと解釈できる。なお、リバタリアニズムと伝統主義を和解させようとするフュージョニズムの内在的矛盾が一因となって YAF は分裂したのであったが、リバタリアン運動の場合も、同様の理由で伝統主義をめぐる内部分裂が発生しているのは興味深い。この問題は本研究の問題設定にとつてきわめて重要なので、次稿以降で詳しく取り上げる予定である。

⁹ Paul Edward Gottfried, *The Conservative Movement: Revised Edition*, Twayne Publishers, 1993, p. 134.

¹⁰ Murray N. Rothbard (Edited with an Introduction by Llewelyn H. Rockwell), *The Irrepressible Rothbard: The Rothbard-Rockwell Report, Essays of Murray N. Rothbard*, Center of Libertarian Studies, 2000, pp. 100-15. なお、ロスバード自身は世俗的なユダヤ人である。

¹¹ パレオリバタリアニズムについて早くから注目してきた日本ではまれな存在と解釈できる副島隆彦は、ケイトー・インスティテュート副所長のデイヴィッド・ボウツ (David Boaz) を「正統派のリバタリアン」と規定し、自らを「ポピュリスト」と呼んでいる。ポピュリストとは、この場合、パレオリバタリアンないしはそれに近い立場を意味していると思われる (デイヴィット・ボウツ著 (副島隆彦訳), 前掲書, 397頁)。なお、リバタリアンの理論家といえば、日本のアカデミズムの世界では、政治学者としては、ロバート・ノージック (Robert Nozick), 経済学者としては、ハイエク, ミルトン・フリードマン (Milton Friedman) などがまぎらわぬ挙げられるであろうが、アメリカの保守主義運動ないしリバタリアン運動の研究においては、ハイエク, ミーゼスやミルトン・フリードマンを除けば、アイン・ランド (Ayn Rand) とロスバードである。

¹² 前掲拙稿。

¹³ Paul Edward Gottfried, *op.cit.*, p. 146.

¹⁴ Justin Raimondo, *Reclaiming the American Right: The Lost Legacy of the Conservative Movement*, ISI Books, 2008.

¹⁵ 07年末に大統領選の文脈でロン・ポールの支持者によってボストン・ティー・パーティー・イベントが開催されたことがいわゆるティー・パーティー運動の端緒であるとの解釈があることはあまり報道されていない。オバマ政権成立後、盛り上がりを見せるようになったこの

ティー・パーティー運動には、ロン・ポールの子息・ランド・ポールの立場に代表される防衛費の削減にも切り込むより徹底したリバタリアンの主張とサラ・ペイリンの立場に代表される防衛問題ではタカ派、その他の財政問題ではリバタリアンという主張とが入り乱れている。運動はタカ派の共和党主流派と親和性がある後者の立場が濃厚となり、共和党主流派によってかなりの程度取り込まれつつあるようにも見える。

¹⁶ Joseph Scotchie, *op.cit.*, pp. 3–4.

¹⁷ Paul Edward Gottfried, *op.cit.*, pp. 145–8.

¹⁸ Joseph Scotchie, *op.cit.*, p. 7.

¹⁹ なお、ロン・ポール旋風を追い風に、彼の子息で、ティー・パーティー候補としてケンタッキー州の10年共和党上院予備選挙に勝利したランド・ポールが64年の公民権法は所有権の観点から正しくなかったと述べたため、メディアから集中砲火を浴びて窮地に立たされたことは記憶に新しい。公民権に対し懐疑的であるのは、ロスバードのいう「左翼リバタリアニズム」と異なるパレオリバタリアンの特徴の一つである (Murray N. Rothbard, *op.cit.*, pp. 100–15.)。

²⁰ Justin Raimondo, *op.cit.*

²¹ 前掲拙稿。

²² Paul Edward Gottfried, *op.cit.*, pp. 78–96; pp. 118–41; Patrick Allitt, *The Conservatives*, Yale University Press, 2009, pp. 191–223; Justin Vaisse (translated by Arthur Goldhammer), *Neoliberalism: The Biography of a Movement*, the Belknap Press of Harvard University Press, 2010.

²³ Murray N. Rothbard, *op.cit.*; Murray N. Rothbard, “Life in the Old Right,” in Joseph Scotchie, *op.cit.*, pp. 19–30; Justin Raimondo, *op.cit.*

²⁴ Paul Edward Gottfried, *op.cit.*, pp. 145–6.

²⁵ かつて筆者は、アメリカの右翼の実態を検討するとの研究構想を提示したことがある。その際、「右翼」という用語をあえて採用した理由として第一に保守主義という言葉を自ら拒否する人々がいること、第二に保守主義という言葉によってはアメリカ政治に内在する深刻な人種主義やミシシッピ運動などをカバーしにくいことを挙げた (前掲拙稿, 120–1頁)。この視点が研究に不可欠だと考えは変わってはいないが、調査を進めていくうちに、先行研究が多い保守主義運動という研究対象をパレオコンサーバティブの視点から相対化するという手段の採用が有益だと考えるようになったため、本稿の題名を「保守主義運動に関する一考察」とした。ただし、以前の問題設定の意図は十分に汲み取りつつ、研究を進めたい考えである。特にパレオコンサーバティブやパレオリバタリアンの中には、ロスバードやサミュエル・フランシスのようにポピュリズム的志向性が強いいため、保守主義という言葉を嫌う者が少なくない。しかもパレオコンサーバティブには思わしい極右的な要素がかなり伴う点も重要である。しかしながら、より本質的には、一般に「尊敬されるべき存在」とみなされている保守の政治家や知識人すら意図するとせざるにかかわらず、大衆の偏見を当てにするような言動を示す傾向があったことである。ジョージ・ナッシュのような保守主義運動研究の弱点として、たとえば、人種主義を十分深刻に考慮していないとする指摘は重いものがある (以下の文献を参照)。以上のことに留意しつつ、語の使用される文脈を慎重に確認しな

がら右翼と保守主義という用語を使い分けていくしかないというのが現在の筆者の見解である。Joseph E. Lowndes, *From the New Deal to the New Right: Race and the Southern Origins of Modern Conservatism*, Yale University Press, 2008; Dan T. Carter, *From George Wallace to Newt Gingrich: Race in the Conservative Counterrevolution 1963–1994*: Louisiana State University Press, 1996; Nancy MacLean, “Guardians of Privilege” in Donald T. Critchlow and Nancy MacLean ed., *Dabating the American Conservative Movement: 1945 to the Present*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2009; Paul V. Murphy, *The Rebuke of History: The Southern Agrarians and American Conservative Thought*, The University of North Carolina Press, 2001.

²⁶ Patrick Allitt, *op.cit.*, p. 2.

²⁷ たとえば、以下を参照されたい。George H. Nash, *The Conservative Intellectual Movement in America Since 1945: Thirtieth-Anniversary Edition*, ISI Books, 2006, p. 233; Gregory L. Schneider, *The Conservative Century: From Reaction to Revolution*, Rowman & Littlefield Publishers, 2009, p. 58; Paul Edward Gottfried, *Conservatism in America: Making Sense of the American Right*, Palgrave MacMillan, 2009, p. 9; Patrick Allitt, *op.cit.*, p. 159.

²⁸ *Ibid.*, p. 159.

²⁹ George H. Nash, *op.cit.*, p. 233.

³⁰ Gregory L. Schneider, *op.cit.*, p. xii. 同様の見解として、たとえば、以下の文献がある。George H. Nash, *op.cit.*; Patrick Allitt, *op.cit.*

³¹ Frank S. Meyer, *In Defense of Freedom and Related Essays*, Liberty Fund, 1996.

³² たとえば、以下を参照されたい。Gregory L. Schneider, *op.cit.* あるいは、茶谷展行「アメリカにおける保守主義運動とは何か」吉原欽一編『現代アメリカ政治を見る眼—保守とグラスルーツ・ポリティクス』日本評論社、2005年、162頁、佐々木毅『現代アメリカの保守政治』岩波書店、1984年、29–31頁。アメリカの保守主義一般ではなく、特にその保守主義運動に焦点を当てている茶谷論文が特に参考になった。

³³ Patrick Allitt, *Catholic Intellectuals and Conservative Politics in America, 1950–1985*, Cornell University, 1993.

³⁴ Paul Edward Gottfried, *op.cit.*, 2009, p. 9; Alan M. Wald: *The Rise and Decline of the Anti-Stalinist Left from the 1930s to the 1980s*, The University of North Carolina Press, 1987.

³⁵ Patrick Allitt, *op.cit.*, 2009, pp. 180–1; Patrick Allitt, *op.cit.*, 1993; Paul Edward Gottfried, *op.cit.*, 2009, pp. 10–1. これに対して、『ナショナル・レビュー』以前の孤立主義的な「オールドライト」はバックリーたちと対照的にプロテスタントである傾向があったとする見解がある (Patrick Allitt, *op.cit.*, 2009, p. 180.)。またこの時期、61年にケネディがカトリック教徒としてはじめて大統領となっていくように、カトリック教徒は一般に戦後の資本主義の復活に伴う階級上昇の過程にあったが、同時に、ケネディが大統領となる際に発生した宗教論争に見られるように、いまだプロテスタントによるカトリックへの強い偏見が残っていた。この微妙な彼らの位置づけがバックリーたちの保守派としての自己主張の一つの背景となっていたと思われる (Patrick Allitt, *op.cit.*, 1993; 2009.)。たとえば、自らの母校であるイエール大学で社会主義と無神論が教授されていると告発したバックリーの処女作に対し、同じくイエール

ルの卒業生で、マーシャル・プランの策定に関与し、後にケネディ政権の「ベスト・アンド・ブライテスト」の一人となるマクジョージ・バンディ (McGeorge Bundy) による『ニュー・リパブリック』への寄稿という方法でなされた同大学の公式の返答は、教育方針においてカトリックがイエールのプロテスタントといかに異なるかを指摘するものであったという。これはバックリー信仰への攻撃とあってよいであろう (Gregory L. Schneider, *op. cit.*, pp. 56-7.)。言い換えれば、マッカーシーとバックリーたちによる反共主義は台頭するカトリック保守派によるリベラルでプロテスタントでありがちな既存のエリート層への攻撃という側面があったのかもしれない。なお、バックリーたちの保守主義におけるカトリック保守としてのエートスと階級の上昇という二つの要因の絡み合い如何という問題 (同様に、多くのカトリックがレーガン・デモクラットになったという問題) は、ユダヤ系左派におけるネオコンサーバティを含む保守派への転向において、宗教ないしエスニシティ (シオニズムなど) と物質的利害 (ユダヤ人の階級上昇) のそれぞれがいかに寄与したのかという問題とおそらく同質の問いであろう。本注で指摘したこれらの争点は筆者の問題関心にとってきわめて重要なので、次稿以降で取り上げたいと考えている。

- ³⁶ この矛盾は本研究のテーマに非常に重要なので、次稿以降で詳しく取り上げる予定である。この矛盾については、YAF について言及した注 8 も参照されたい。この矛盾を検討課題とした以下の文献はマイヤー、ポゼル、ロバート・ニスベット (Robert Nisbet), リチャード・ウィーバー (Richard M. Weaver), ロスバード、カークなどの多彩な論文を掲載していて非常に便利である。George W. Carey ed., *Freedom and Virtue: The Conservative/Libertarian Debate*, Intercollegiate Studies Institute, 1998. なお、本書の編者のジョージ・ケアリーは、バックリーに多大な影響を与えたイエール時代の恩師・ケンドールの愛弟子で、ケアリーはケンドールと共著を出すほどの関係であったが (Willmoor Kendall and George W. Carey, *The Basic Symbols of the American Political Tradition*, Louisiana State University Press, 1970.), 近年は、本稿で取り上げたパレオリバタリアンのライモンドに共感する立場へと変わったようである (George W. Carey, "Introduction to the 2008 Edition," in Justin Raimondo, *op. cit.*, pp. XI-XVI.)。
- ³⁷ これは文脈依存的であり、『ナショナル・レビュー』にも意見の相違が存在していたことはいうまでもない。そのような相違に内在する架橋しがたい亀裂について次稿以降で検討していきたい。
- ³⁸ Paul Edward Gottfried, *op. cit.*, 2009.; Gregory L. Schneider, *op. cit.* なお、シュナイダーがパレオ・コンサーバティブかどうかは不明であるが、明らかに彼らの主張に共感的な立場から保守主義運動の歴史を構成していると判断できる。
- ³⁹ 本稿では、原則、オールドライトは、ロスバードに倣って (Murray N. Rothbard, "Life in the Old Right," in Joseph Scotchie, *op. cit.*, 1999, p. 19.), 1933年に始まるニューディール政策から1955年の『ナショナル・レビュー』の出現とともに、ほとんど死をむかえるか、消え去っていった右翼であると定義し、場合によって、33年以前の右翼も含むものとする。ただし、佐々木毅のように東部エスタブリッシュメントに対抗心を持った中西部などの「メイン・ストリート保守派」で『ナショナル・レビュー』とゴールドウォーターによって代表される右派をオールドライトとみなす見解もあり (佐々木, 前掲, 14-6 頁), この見解は、パレオコ

ンサーバティブとなりつつも、『ナショナル・レビュー』の初期は評価するニューライトのサムエル・フランシスに近い (Samuel Franks, *Beautiful Losers: Essays on the Failure of American Conservatism*, University of Michigan Press, 1993.) と思われる。

40 George H. Nash, *op.cit.* なお、ゴットフリードは、ナッシュの著作を軽視しているわけではけっしてなく、「もっとも包括的でバランスのとれた調査」であるとしている。Paul Edward *op.cit.*, 1993, x.

41 *Ibid.*, ix.

42 Paul Edward Gottfried, *op.cit.*, 2009, pp. xii-xiii. なお、パレオ再編成の時点でのオールドライトの数少ない生き残りの一人であるロスバードがその一例である。

43 Samuel Franks, *op.cit.*

44 Patrick J. Buchanan, *Where the Right Went Wrong: How Neoconservatives Subverted the Reagan Revolution and Hijacked the Bush Presidency*, Thomas Dunne Books, 2004.

45 Gregory L. Schneider, *op.cit.*, p. 154.

46 *Ibid.*, pp. 173-4.

47 Gregory L. Schneider, *op.cit.*, pp. 171-5; Joseph Schochie, *op.cit.*, p. 29; Justin Raimondo, *op.cit.*

48 Paul Edward Gottfried, *op.cit.*, 1993, p. 87.

49 Patrick J. Buchanan, *op.cit.*, p. 36.

50 Joseph Scotchie, *op.cit.*, pp. 1-15; Gregory L. Schneider, pp. 167-71; Paul Edward Gottfried, *op.cit.*, 1993; Paul Gottfried, *op.cit.*, 2009; Paul V. Murphy, *op.cit.*

51 Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America*, Harcourt & Co., 1955 (有賀貞訳『アメリカ自由主義の伝統』講談社, 1994年)。ハーツはその後の保守主義の隆盛を見ておらず、また出版以来、彼の学説に対し異議が出ているが(訳者解説, 参照), その考察は本稿の議論の文脈では概ね妥当と思われる(佐々木, 前掲書, 24-31頁, 参照)。なお、パレオコンサーバティブの学者であるポール・ゴットフリードはその著作 (Paul Edward Gottfried, *op.cit.*, 2009, pp. 1-23.) の中でラッセル・カークの伝統主義に疑念を提示する文脈で基本的にハーツに同意の立場をとっている。同様に、パレオコンサーバティブと親しい関係にあるクリストファー・ラッシュの以下の著書を参照されたい。Christopher Lasch, *The True and only Heaven: Progress and Its Critics*, WW. Norton & Company, 1991.

52 Gregory L. Schneider, *op.cit.*, 1-32; Patrick Allitt, *op.cit.*, 2009, pp. 126-57.

53 *Ibid.*, pp. 62-4.

54 デイヴィッド・ボウツ, 前掲書, 52-6頁。

55 アメリカでは革命から現在までの保守主義の歴史全体を描いた著作はまれである。こうした試みを取行したパトリック・アリットは保守主義とは何にもまして「社会的・政治的な変化に対する態度」であるとし、保守主義運動以前にもそうした態度は存在していたと主張している (Patrick Allitt, *op.cit.*, 2009, p. 2.)。